

「奴隷級は不謬ではない」という記事について

「不謬」（ふびゅう）という言葉は普段あまり聞かない難しい言葉です。

ワースロで「あやまる」と入力すると「謝る、誤る、謬る」と変換候補が出ます。

この二つの字を使った熟語に（【誤謬】ごびゅう）というのがあります。辞書にはつぎのような意味であるとされています。

(1) まちがえること。また、そのまちがい。

(2) [fallacy] 一見正しくみえるが誤っている推理。

推理の形式に違背したり、用いる言語の意義が曖昧（あいまい）であったり、推理の前提が不正確であることから生ずる。 詭弁（きべん）。論過。虚偽。

ここから分かるように不謬とはその反対の意味で、「理論や判断にまちがいがないこと」という意味になります。

それで「不謬ではない」とうのは、もう一度反対になって、「誤謬がある」という意味になります。

そもそも、この「不謬」という語は、主にカトリックの教義に関して用いられ、1870年には、「教皇の不可謬性」が教義とされました。「教皇の不可謬性」とは、信仰や道德に関して教皇が教皇座から教示するとき、すべての誤謬から守られると言うもの。簡単に言えば、「教皇は間違いがたつことは絶対に言わないし、間違いも犯さないということ。」

ということになります。ものみの塔はこれを批判し、また対抗して、「奴隷級は、不謬ではない」と胸を張って、高らかにこう宣伝しています。

*** 塔 02 12/1 17 ページ 18 節 神の言葉の個人研究を楽しむ ***

「奴隷級は「忠実で思慮深い」とされていますが、イエスは、奴隷級が不謬であると言われたわけではありません。忠実な油そそがれた兄弟たちのこの一団も、やはり不完全なクリスチャンから成っています。最善の意図をもって事に当たっても、間違いをする場合はあります。」

*** 塔 88 12/1 22 ページ ギレアデ第 85 期生卒業式 喜びに満ちた行事 ***

「学校の二人の教訓者は、生徒たちにどんな送別の諭しを与えるでしょうか。

まず J・D・レッドフォードが「自分の間違いを認めなさい」という題で話しました。レッドフォードは、「わたしたちはみな何度もつまづく」ということを知っていても、犯した間違いを指摘されると自分を正当化する傾向があることを指摘しました。（ヤコブ 3:2）『間違いを認めようとしないのは、自分が不謬であると主張するようなものです』とレッドフォードは述べました。自分の間違いを認めるのは知恵の道です。なぜそう言えますか。話し手はこう説明しました。『明らかに間違っているのが分かっているながら、なお自分は正しいと言い張るなら、だれもその人に対する敬意を保つことはできません。

自分が正しいという外観を取り繕うために真実も犠牲にすると、経験から分かっている人を、どうして信頼できるでしょうか。

間違いを認めるなら、わたしたちの内に強さや自尊心が築かれます。しかし間違いを認めるこ

とができないのは臆病であり、わたしたちを道徳的に弱めます』。

*** 証 26 ページ 一致のうちに神の羊の群れを牧する ***

「統治体は、ものみの塔協会の理事会として奉仕する 7 人を含む、油そそがれたクリスチャンの男子の一団で構成されます。(1986 年は 13 人) これらの男子はエホバの証人の全世界の活動を統轄します。彼らは神の靈感を受けてはいないので、不謬ではありませんが、神の不謬のみ言葉を地上における最高権威として信頼し、神のご意志に従って人生を過ごしてきた経験を持っています。」

この記事を使い安くと、「神のみ言葉「聖書」を間違いのないものとして、信頼し、神のご意志に従って人生を過ごしてきた経験を持っている」のは、クリスチャンとして当たり前で、そうした自覚を持って行っている人をクリスチャンと呼びます。特別な靈感を得ているわけでもないのも、皆同じです、従って、「統治体」と普通のクリスチャンと異なるところは何もありません。と上記の記事は述べています。

次のものみの塔の記事は示唆に富んだものです。

*** 塔 07 3 / 1 13 ページ ウェッセル・ハンスフォルトー「宗教改革以前の改革者」*** ルター、ティンダル、カルバンといった名前は、1517 年に始まった宗教改革について勉強した人ならだれでも、よく知っています。しかし、ウェッセル・ハンスフォルトという名はほとんど知られていません。この人物は、「宗教改革以前の改革者」と呼ばれています。この人についてもう少し知りたいと思われませんか。

ウェッセルは教皇の不謬性にも疑問を抱きました。教皇も誤りを犯すのだから、民衆が常に教皇を信じなければならないとしたら、キリスト教信仰の基盤は弱いものになる、というわけです。ウェッセルはこう書いています。「もし高位聖職者が神の命令をわきへ押しやり、独自の人間的な命令を出すなら、……その行ないも命令も無意味である」。

この「ものみの塔」の記事が言おうとしていることはつまり、こういう事です。

「奴隷級」も誤りを犯すのだから、エホバの証人が、常に「奴隷級」を信じなければならないとしたら、キリスト教信仰の基盤は弱いものになる。「もし統治体が神の命令をわきへ押しやり、独自の人間的な命令を出すなら、……その行ないも命令も無意味である」。言い換えれば、この 100 年ほどの間に、その解釈が常に変わり続けているという事実は、間違いなく、独自の人間的な考えに基づくものであったものが少なくないとうことを、結果的に証明しているので、もし、その間違いを常に受け入れていかなければならないとしたら、その行いも、教理も無意味である。ということを読者に示している記事です。